

# いつきの“ヒューマン・ビーイング”

## 人権について考える ⑬

### 部落問題学習との出会い

#### 土肥いつき

京都の公立高校教員。24時間一人パレード状態のトランス女性。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

もともとわたしが学校の教員になりたいと思ったきっかけは、子どもが好きとか、数学を教えたいとかではなく、職員室の中でコーヒー片手に談笑している教員の姿を見て「いいな」と思ったからです。なので、昔も今も、数学を教えるよりも雑談をしたいタイプです。数学を、それも数学が苦手な子に教える難しさと楽しさがわかるようになったのは、教員になってずいぶんたってからのことです。そんなわたしにとって、担任は教科以外の話ができる楽しい仕事でした。

はじめて担任になった年の6月、生まれてはじめての同和学習の時間がきました。2時間連続の同和学習で担任に与えられたテーマは「自分と人権問題の出会いを語れ」、これだけでした。当時のわたしは、その前年から隣保館学習会をはじめ、部落出身生徒と少しずつかわりができてきた頃でした。何を語ったのかは覚えていませんが、とにかく必死で2時間語り続けたことは覚えています。それ以降、わたしは同和学習の時間だけでなく、普段のショートホームルームや授業の時間も使って、さまざまな人権課題について生徒に語りました。そのなかでも最も多くの時間を使ったのは、やはり部落差別についてでした。

部落問題学習の教材はたくさんあります。例えば、就職差別はそのひとつです。差別ゆえに安定した企業に就職できず、貧困な状況に置かれ、それが子世代の低学力を生み、結果として安定した企業への就職を阻まれるという形で差別が再生産される状況が長く続いていました。しかし、1960年代に生徒が就職差別を受けたことが顕在化し、それと教員が闘う中で、統一応募用紙が作られ、能力・適性に関係ないことは「言わない・書かない・提出しない」というとりくみがはじまりました。わたしはそんな歴史を話すとともに「例えば、面接の時に『自分の家庭環境は話しても大丈夫』といって話したら、それは『話せない』生徒を差別することにつながる。話さないことが『話せない』友だちを守ることになるんや」と語りました。

あるいは前号でも少しとりあげた結婚差別にもとり

くみました。例えば生徒たちに『もしも自分が部落の人と結婚するとしたらどう思う?』とさりげなく保護者と話をしておいで』という宿題を出したことがありました。さまざまな保護者の意見を読みながら、決して結婚差別は遠い話ではないこと、そして結婚差別に直面した時、どういう態度をとるのかを、みんなで考えました。このようにして、生徒たちに自らは差別と闘う主体であるということを伝えてきました。

また、こうした差別の実態だけでなく、なぜ部落差別が存在するのかということ伝えるために、数学の教員でありながら部落の歴史も教えました。

当時、部落差別の起源については「近世政治起源説」が主流でした。これは、江戸幕府が「士農工商」という身分をつくって分裂支配をおこない、被差別身分はそれらの不満のはげ口、いわば沈め石としてつくられたというものです。そして、現在も残る部落差別は封建遺制の残滓とされました。と同時に、政治権力によってつくられた差別や貧困は、政治の力によって解決できるとされました。ただ、このような歴史観をそのまま伝えた場合、生徒たちは自分とは関係ないと考えてしまいます。だからこそ、差別の現実や、差別との闘いを力を込めて話したのです。

ある卒業生から「先生は、なんであんなに同和学習に力を入れてたんや?」と聞かれたことがありました。それに対して、こんなやりとりをしました。「お前、〇〇さんが部落やって知ってるやろ」「知ってる」「もしも自分が部落を差別するかしらないかという場面に直面した時に、〇〇さんの顔が浮かぶやろ」「うん」「そしたら、差別できひんやろ」「うん」「そのためや」。その卒業生は「なるほど」と納得してくれました。

やがてわたしは担任という立場から同和教育担当、あるいは人権教育担当という立場になりました。専門的に部落差別や、他の人権課題について学ぶ中で、それまでの自分のとりくみを捉え直すようになりました。その中身や、現在おこなっている部落問題学習について、次号で書こうと思います。